

思い出

二十四回生の方で千里山会会員ではないけれど「思い出」と題し、三編を寄稿していただきました。匿名を希望されているので名前は伏せさせていただきます。大阪の方で会社を経営されています。

一・講堂裏の池

小学校の昼休み。講堂の裏の池は絶好の遊び場だった。いつものようにカエルを釣るため左手で岸の草をつかみ、思いつきり身体を伸ばした。「もう少しで釣れる」(長い草の穂先を巻いて直径5センチほどの輪を作りカエルの首に引っ掛けて引っ張る)と思ったと同じ時に足元がズルズル

「あつー」池にドッポン。すり鉢型の池の底から一度水面に浮いた時、池の周りにいたみんながもがいている私を眺めているのが見えた。ぐるぐる回って沈んで



釣れたけど……

いく。「もう息がもたない」と思ったとき、足が底に着いたのでおもしろい蹴った。

誰かが私の腕をつかんで引っ張りあげてくれた。そうでなければ私にはもう岸に這い上がる力も無くなっていたから、間違いなくその日が私に「命日」になっていた。気が付くと小使いさんの背におんされて末広医院に運ばれている途中だった。昭和二十二年(1947年)春のことである。

どこの学校にも住み込みの「小使いさん」がいて、始業、終業の鉦をたたいてくれた。ちよつとした大工仕事や運動場の草むしりもしてくれるし、子供だったがちからも好かれていた。あの頃は救急車もなかったのかな。

お礼も言わずにそれっきり。大人になって、引張りあげてくれた〇〇君(だったと思う)と小使いさんにお礼を言いたく、十年ほど前に小学校に行ったが、見慣れた校舎も講堂の裏池もなかった。千里第二小学校自体が引っ越していた。

当然ながら小使いさんご夫婦は居られなかったし、〇〇君も名古屋の方へ転校していったような・・・で、空しく帰ってきた。大柄で目がクリクリッと丸く、

ホッペの赤い健康な学友だった。

それから今日までずっと、彼の居場所がわかれば会ってそのときのお札を言いたいと強く思い続けている。当時は小中学校の敷地内に「野池」があつて、柵などまったく無しにみんなの遊び場になっていた。

今の「何でも人のせいにする」風潮になつた社会では考えることも出来ない自己管理時代のことである。あの小学校の講堂裏の池には私以外にも何人もが落ちてはまっているはず。

戦争中の防火用水だつたのかもしれない。

去年の四月三日に小学校の同級生の花見会があつた。あの私の事件？から六十年。〇〇君の事をみんなに聞いてみたがはつきりしたこと解らなかつた。

いっそのこと「探偵ナイトスクープ」にお願いしたほうが良いのかな？

〔会誌編集者 追記〕

下段の写真は昭和4年と古いのですが、講堂の写真です。池はこの左手にありましたね。昭和25〜6年であればそれ程変つてはいないと思います。



昭和4年創立当時の頃

二・夏休み・・・反省・・・

今でもあるのかどうか知らないけど、私たちが子供（戦後すぐ）の頃の夏休みには宿題のほかに必ず絵日記帳が配られた。わら半紙のような粗末な紙の縦書きノートだった。上半分には絵を描き、下半分は縦線が引いてあつてそこに一日分の日記を書くやつで、各ページの右上に「月日」「曜日」「天気」と印刷してあるあれのこと。思い出した方もおられるでしょう。

Ⅱ 今日から夏休みⅡ

毎朝、ほんとうに毎朝、目が覚めると母親が「涼しいうちに宿題と昨日の絵日記を書いてから遊びに行きなさい」というのを尻目に、破れそうな麦藁帽子をかぶり、裸（パンツ一枚）で飛び出す。朝から晩まで遊ぶのだ。遊びはいくらでもあつた。近くの池で泳いだり、蛭に吸い付かれながら小川で小魚やエビを取ったり、枝振りの良い大きなくすのきなどに縄を使って基地を作ったり、蟬やキリギリスを捕まえてきて蚊帳の中にに入れて叱られたりしていた。絵日記のことは頭のどこかにあるのだが当然ページも書いていない。夕焼け空に隊列をなして飛んでくるギンヤンマに向

かつて五十センチほどの糸の両端に小石をつけたものを放り投げるのだ。小石を虫と思ひ近寄つてきたところで糸に絡まって落ちてくる。うまくいったときは興奮する。雌は羽根が茶色で「泥メン」と言つて貴重な獲物だった。やがて薄暗くなつても家に帰るのを忘れて遊ぶ。祖母の口癖は「夕ご飯までに帰つて来んなら、何にも食べさせせん！」（今ならコンビニがあるのに。）日が経つにつれて母の《声》が厳しくなるが「夏休みはまだ十日もあるワイ」「まだ五日もあるヤンケ」と暗くなるまで遊び続ける。

夏の終わりにはクロンボ大会だ。今のようにUVケアーなどと言う言葉もなく、一番黒く日焼けした子が《優勝！スイカ》がもらえた。

Ⅱ そして・・・明日は九月一日始業式Ⅱ

絵日記帳は真っ白。今年もまた妹の絵日記帳から《過去一ヶ月の天気》を写させてもらう。絵の欄は真っ白、日記の欄には「今日は何も無かつた」を三十ページ分書いて・・・今年もまた先生にどつかれる。でも僕一人ではない、そんな仲間が大勢いたものだ。

いまだに私のこの癖？は治らないし、死ぬまで治りそうに無い。

三、給食

小学校の給食費を払わない親が沢山いるという。それもどうしてもお金が無くて払えないのではなく、ハイクラスの車に乗りお金には困っていない家庭が多いと聞いて驚いた。

そんな親には「あなたの子供には給食を食べさせません」と言えはいいと思う。親はどんな態度に出るか知らないがそれでいい。自分の子供がかわいくないのか。それが当たり前と思うのに「食べさせないのはいけないこと」という今の世の中は一体どうなっているの。私にはどうも鼻屑目に見ても「親の気持ち」も「今の世の中」も理解できない。

先生が自腹を切って給食費を払ってくれているのがわかっていながら、知らんふりを決め込む親、義務を忘れて権利ばかりを言う親に親の資格は無い。

私が子供の頃はほんとに給食費の払えない子がクラスに一人や二人はいた。

昼休みになるとその子らは食べたふりをして校庭で遊ぶのだ。クラスのみんなが相談して「食べなくて平気だ」と言うその子らにミルクやパンを分けてあげた。

私は貧乏ということがどんなにつらいことかよくわからない子供だったが、それはそれとして起用に竹とんぼを作ったり、材木を切ってくれたり、力持ちで木登りや魚釣りが上手で喧嘩が強い「彼」を尊敬していた。

大人になって中には間違った道に進んで新聞沙汰になった人もいたが、今でもどこかで出会うと親しく話しをしている。(だからなのか今いる周りの人たちは私に友達が特別多いように思って驚くようだ)。

そんな彼らのほとんどは立派になって根性の座った仕事をしている。女の子は「ヘー」というようないい人と幸せな結婚をしている。

何十年か経つての同窓会でもニコニコ平気で当時のそんな話をする。それだけ絆が強いのだ。

みんな歳をとってしまったが、地元でお寺の檀家総代をしている何人かが中心になっている企画をしてくれる。育った街に戻って《子供にかえた》みんなと会うのが私の楽しみの一つになっている。

神崎川のオッサン